

## 39 社会教育の「再設計」?!それは何?そして、それをどのように進めたらよいか?!

堂本 彰夫

(1) 実態(体?)はある?!では、何故、どう「再設計」が必要なのか?そこが示されないと話にならない!?

最初に、余談的なこととなるが、久しぶりに(本当である!若干笑?)、かの『(大判)社会教育』(日本青年館発行)からの原稿執筆依頼がありそうなので、このタイトルの論考も、それを待って並行して行うつもりであったが(だから、遅れた!)、実際にお願ひされたテーマが、少し(否、大いに?)違ったものであったので(「社会教育の温故知新」)、それとは無関係に、本論考を進めていくことにした(ただし、想いは通底している?)!なお、依頼原稿の方は、すぐに作成し、編集部に送らせてもらっている。多少、余りにも早く書かせてもらったことを後悔しないわけではないが(失礼かとも?思ったが、分量が少なかったこともあり、一日で済ませた!掲載は8月号とのこと!)、これが私の性分(弱点かもしれない?)でもあり、仕方がない(笑)!今は、この論考に、思いの丈を注ぐしかない!そう思っただけの仕上げであるということである!

さて、改めて、現在、一部?の心ある人達が、「社会教育の再設計」とか、「公民館の再発見」とか、そういうフレーズで、言わば「社会教育の存在意義の再考」を行っていることは、前にも述べたことがあるし、その後も、そうした動きは活発になっていることと思う?!残念ながら、その具体は、直接には知ることが出来ないが、時代状況的には、まさにその必要性/必然性が高まっていると言わざるを得ないからである!いずれにしても、私は、その主張/動きに対しては、心からの賛同、そして敬意を払いたいと思っているが、その意味では、ここでの論考は、それに便乗しての、私なりの「社会教育再考」(最後の?)ということになる?!最前線で活躍・奮闘されている人達への、確かなエールとなるのか?若干の不安や懸念もないわけではないが、まがりなりにも、長年関係者の一人として奮闘してきた?私なりの総括ということでもある?!

ただし、相変わらずの?理想・理念だけであれば(しかも文章が分かりづらい?)、最早要らない(もう沢山だ?)と言われるかもしれない?!だが、よしんばそう言われても、これは、ある種の私の意地でもあるので、敢えてそうさせてもらう次第であるが、ここで言いたいことは、標記のように、「社会教育の実態(実体?)はあるのに、何故、どこが、どのように『再設計(再発見)』が必要なのか?そこが示されないと話にならない?!」、そういうことである!言い換えれば、そこに、新たな発見(再確認でもよい!)と、それを実現するための確かな方向性と方途(戦略?)が指し示されていなければ、単なる懐古・回帰主義、あるいは個別の、自分達の主義・主張だけの吹聴で終わってしまうということである(こうしたことは、ある意味、これまでも何度も繰り返されてきたことである?)!

ということで、「教育」には、家庭教育、学校教育、社会教育の、言わば「三つの教育(形態)」があるわけであるが(ただし、これは、教育の行われている場から見た大括りの分け方である!)、「教育の現存在」という点では、これ以上の分け方はない(一応すべてをカバーしているということ!)。だが、関係者も、そこが大変悩ましいところであったが、「社会教育」だけが、「社会」というものの「茫漠(曖昧?)さ」や主体の「多様性」故に(→広狭二義、イメージや対象領域が共有しづらい?しかも、その特性(ノンフォーマル性、そして限りなくインフォーマル性を包摂する?)故に、まとまった形での動きが取りにくい!要は、全体としての「社会教育」が、一体何なのかの合意形成がなしづらいということである!しかも、近年では、役所(基本は教育委員会)の担当部署名も、それこそバラバラとなっている(「生涯教育/学習」への包摂、それとの並置、部署自体の消失/他部署への移管・移行→社会教育の危機?とは、ある意味、社会教育行政のそれでもある?)?!

(2) 実態(体?)を把握(確認)すること!まずは、そこから始まる!

そこで、まずは、「社会教育の再設計(再発見)」に当たっては、上記のような社会教育の実態(体?)、しかも、どこが、どのように危機に陥っているのかの原因を把握(確認)しなければならない!ヒト、モノ、カネ、それらの要素が困窮、弱体化しているから(しかも、その回復は望めそうもないという現状認識で)、そうなのだという表層的理解もあるのであろうが、そもそも、何故そのようなになっているのかである(財政逼迫や、生涯学習まちづくり事業等の沈潜化によるということであろうが?)!直近の被害・災害対応やコロナ対応等と直接比べることは出来ないが、その必要性や優先性が損なわれている(否、当初からそうである?あるいは、依然として「学校教育至上主義」である?)?!だから、そうした扱いが、当然のようになっている?!

だが、考えてみると、社会教育(の関係者)は、地域の問題やそこで暮らしている人々の生活の改善や向上を図るために、日夜頑張ってきたのではないか?まさに、「地域づくりと人づくり」を標榜して!であれば、その存在意義は、増すことはあっても、決して減じられることにはならないのではないか?そこで、もし、そうなっているのであれば、その標榜してきた存在意義が実現されていない?あるいは、評価されてい

ないということにもなる？ただし、これについては、若干思い当たらないわけではない？！いわゆる「生涯学習」が、まさに「お金と時間、つまり生活にゆとりのある人達が行うもの」というような受け止め方がなされてきたということである！例えば、「公民館」は、そういう人達の専有物ともなっていた？！

もちろん、それはそれで、善いことではあったのであるが（外部からの評価とは裏腹に、そこは、利用者の生き甲斐づくりや仲間づくりの場にもなっていた？）、やはりそれだけでは、全体の社会状況が許さなくなってしまった（税金の無駄遣いとか、一部の既得権者への厚遇とか言われた？）！とは言え、これは、今の「社会教育の危機？」の原因の一つかもしれないが（遠因？）、やはり主因（これが、本質的には重要であった？）は、折角訪れてきた「生涯教育（学習）」の理念（教育／学習の「タテ・ヨコの統合」の視点）を、自分達の「地域づくり・人づくり」の形に落とし込むことに、結局は、結びつけられなかったということである？！ただし、この責任の半分（否、それ以上かな？）は、一方の「学校教育側」にあると、私自身は思っている？！

詳しいことは、ここでは、これ以上書けないが、当初（途中まで？）は、双方の関係者が、可能な限りの連携・協力の輪を造ろう、広めようとはしたのである（「学社連携」や「学社融合」とか）！しかし、残念ながら、その意欲も勢いも段々となくなり、気がつけば元の木阿弥状態ともなった？ちなみに、その後「コミュニティスクール」や「地域学校協働本部事業」というような取り組みもなされてきているが（数では相当数に上っている！）、惜しむらくは、そこにあるタイムラグである！しかも、運悪く？（この表記は微妙ではあるが？）、最近年では、「学校教育側」では、例の「教員の働き方改革」が声高に叫ばれ（社会全般に亘ってではあるが！）、一方、さらに手薄になった「社会教育側」では、その荷の重さに汲々とさせられてもいる？！

**(3) 教育行政（とりわけ「国／文科省」）に求めたいこと！それは、「学校教育」と「社会教育」の合力形成が、地域社会全体で行えるようにしていくことである！**

以上、結果的には、いつものような論調になってしまったが、言いたいことは、大きく二つである！一つは、「社会教育」の範域とその呼称の意義及び関係者間の相互理解の必要性（役割とか関係性等の確認）である！ある意味、その捉え方の問題ということになるが、強いて言えば、「社会教育と社会教育的なものの併存」（狭義と広義→これは必然！ある意味自然？）を、いかに関係者が受け止め、その良好な協力関係を築いていけるのかということである！限りある「ヒト、モノ、カネ」（資源）の中で、「自分達さえよければ！他の所など構っておられない！」などというようなことであれば、成果は限定的となり、大きな力とはなり得ない（挙句の果ては、自分達自身が萎れてしまう？あるいは、「儲け主義」の被害者ともなる？）？！

もう一つは、学校を含めた、地域社会全体の教育力を、いかに有効に高め合っていくかという新たな視点の必要性（そこにおける「社会教育」のあり方の確認）である！現在、先述のように、「コミュニティスクール」や「地域学校協働本部事業」という取り組みが進められているが、トータルで言えば、そういうことも含めて、「教育の合力」を、いかにつくり上げていくかである！要は、「教育は一つ」なのである！否、そうでなければ、望ましい成果は上げられない！これもまた、「自分達さえよければ！他の所など構っておられない！」というようなことであれば、それこそ、互いが共倒れともなる？！件の「いじめ、不登校」の問題は、その象徴？でもあり、さらに、「教員の働き方改革」の課題は、まさにそれと連動している？！

まだまだ書かなければいけないことは山ほどあるが、とにかく、以上のような現状／課題認識がどのようなのか？そもそも、そうしたことが、何故、どのように問題、課題なのか？それについての意識やプログラム（研修機会等）、そして人材養成が、必要な形で共有／出現されていないと、話にならない？くどいようであるが、放っておくと、それは、一部の関係者（社会教育を愛している人？）の一方的な思い（片思い？）、あるいは郷愁に過ぎなくなってしまう？一方で、「社会教育（行政）」を所管してきた教育行政のスタンス（覚悟？）が確固としたものにならなければ、関係者達は混乱（苦悩）するばかりとなるのである（批判や「恨み節」の連続では、力強い前進は出来ない？）？！明らかに、近年の動向は、それに拍車をかけている？！

最後になるが、かつて「車の両輪説」というものがあつた（今もあることはある？）！まさに「学校教育」と「社会教育」が、あたかも車の両輪の如く存在する（否、しなければいけない？）とするものであるが、ある意味では、今こそその実効策、換言すれば、「本当に説得力のある施策」が要請されるということでもある？！もちろん、その「形や強度、大きさ」は違うが、「概念の大事さ」とその「成果の総和」という視点で見れば、まさに「両輪」であると言える！そこが、十分詰められていなかったということでもあるが（パッションだけが先行した？）、今、改めて求められるのは、その「大事さ」と「成果の総和」なのである（単純な「そうであるか、そうでないかの議論」は、ほとんど意味はない！）！何故なら、「学校教育」を含めた、あらゆる「教育」の力の結集、すなわちその合力（総力）を、如何につくり出していくかが重要だからである！それが、ある意味「本来の姿」であるばかりではなく、現実的にも、目の前にある、限りある「ヒト、モノ、カネ、（事業）」の効果的な運用が求められるからでもある！

（つづく）